

## 第 67 回（2019 年度）日本チベット学会大会研究発表発表要旨

2019 年 10 月 19 日（土） 於：龍谷大学大宮学舎

### シャーキャ・チョクデンによるチャパ中観解釈の批判

彭毛 才旦（パクモ ツェテン、広島大学大学院）

チャパは『中観東方三論梗概』において、チャンドラキールティの自立論証批判・帰謬論証・仏智論の三点を批判する。そのうち、チャンドラキールティの自立論証批判を再批判する際に、チャパは「不空の否定は空の肯定になるので、空と不空の二者いずれでもないものはあり得ない」と述べ、空性の確立のために自立論証が有効であることを強調する。

これに対し、シャーキャ・チョクデンは『中観決択』においてチャンドラキールティを擁護しながらチャパ説を退け、チャパが唱える「二重否定＝肯定」の論理は、中観帰謬論証派のみならず中観自立論証派や論理学派の学説体系にも見当たるものではないと述べ、ダルマキールティの『知識論決択』、『知識論評釈』、ナーガールジュナの『ラトナーヴァリー』などを根拠に批判する。ただし、シャーキャ・チョクデンは別の文脈で、チャパによるチャンドラキールティ批判がチャパの本意ではなかったとも記述しており、彼によるチャパ中観解釈の理解は一様ではない。シャーキャ・チョクデンは、ゲルク派を全面的に退ける一方で、チベットに自立論証派系の中観思想を導入した功労者であるチャパに対しては一定の評価を与えていたと考えられる。

本発表では、シャーキャ・チョクデンの『中観決択』第二章に論じられるチャパ中観解釈の批判に焦点を当て、チベット仏教における「二重否定」の概念と理解の変遷を明らかにする。

### ツォンカパの道次第思想の形成過程について

更藏切主（大谷大学大学院）

本発表においては、ゲルク派の開祖ツォンカパ（1357-1419）の道次第思想が『菩提道次第大論 (*lam rim chen mo*)』に至るまでに、どのように形成されていったかを、ツォンカパとレンダワ、ラマ・ウマパの関係についての伝記資料、ツォンカパの書簡、小品、『菩提道次第大論』のコロフォンなど、ツォンカパの同時代資料を基に、時間軸に沿って詳しく跡づけること

を目的とする。

『菩提道次第大論』毘鉢舍那章に見られる中観思想の形成過程については、福田（2018）『ツォンカパ中観思想の研究』において明らかにされている。一方、同書では道次第についての聖文殊からの教誨について示唆されている。また、更藏（2018）「ドルンパ『教説次第大論』とツォンカパ『菩提道次第大論』の関連性」（『日本西蔵学会々報』64）において指摘したように、『菩提道次第大論』の完成にはドルンパの『教説次第大論』との出会いの影響もあることが分かっている。それに加えて、道次第思想の形成には、レンダワ（red mda' ba, 1349–1412）との議論、ナムカ・ギェルツェン(nam mkha' rgyal mtshan, 1326–1401)とチュキヤブ・サンポ(chos skyabs bzang po)からの三士の道次第の聴聞など複数の契機がツォンカパの中で統合されてゆき、最終的にはアティシャとカダム派初期の祖師たちの夢を見て、それらが一つのものとしてツォンカパに感得される。

その過程はツォンカパが34歳にラマ・ウマパに出会ってから、『菩提道次第大論』が完成する45歳までの間に、年代を追って跡づけていくことが出来る。これによって、ツォンカパの道次第思想がどのように形成されていったかを詳細に明らかにすることができるであろう。

## 蔵訳『カラーパ・スートラ』及び『ヴリッティ』に関する諸問題

吉田 哲（龍谷大学）

シャルヴァ・ヴァルマン（Śarvavarman）の『カラーパ・スートラ』（*Kalāpa-sūtra*）または『カータントラ』（*Kātantra*）は、インドのみならず、その周辺地域に流行したと考えられているサンスクリット文法書である。チベットにおいても訳出され、大蔵経に収められている（デルゲ版 No. 4282; 北京版 No. 5775）。またドウルガ・シンハ（Durgasimha）によって作られた註釈書『カラーパ・スートラ・ヴリッティ』（以下、『ヴリッティ』）もチベットにおいて訳出され大蔵経に収められている（デルゲ版 No. 4283; 北京版 No. 5776）。ところが、両文献の蔵訳についてはいくつかの問題がある。まず訳者については、蔵訳『カラーパ・スートラ』はその奥書から見てパンロツァワ・ロトェテンパ（dPang lo tsā ba Blo gros brtan pa, 1276-1342）と見なし得るのだが、プトゥン（Bu ston, 1290-1364）の『仏教史』目録部によれば、『カラーパ・スートラ』及び『ヴリッティ』の訳者はタクパギェルツェン（Grags pa rgyal mtshan, 1147-1216）とされているようである。また蔵訳『ヴリッティ』に関しては、北京版とデルゲ版では訳出部分に差異があり、北京版の方がやや長い（約二葉分）。さらに、プトゥンが記したようにこの両文献の蔵訳が同一人物の訳だと考えても問題が残る。それは両蔵訳において用いられる訳語が一致しない例がいくつか

見出され、特に蔵訳『ヴリッティ』には、梵語文法用語の訳語としては不適切と言わざるを得ない訳語がそのまま残置されている。もし蔵訳『ヴリッティ』の訳者がかの高名な翻訳家であるパソツァワのものであるならば、これも不可解と言わざるを得ない。以上のような当該両文献にあるいくつかの問題点を指摘し、検討を行いたい。

## チベット・アムド地域における言語復興運動に関する一考察 ——ボランティアたちの語りを中心に——

シャオランカ （一橋大学大学院）

2008 年前後から、チベット・アムド地域では、民族言語の復興を目指す運動が現れるようになった。この多くは、寺院と宗教関係者が中心的となり、地域社会で純粋な母語での会話を提唱し、村社会で識字教育を行い、経文の読み方を教える教育活動である。一方、青海省 H 県を中心とする地域では、大学生の若者たちは、地域の子どもたちのために、ボランティアで民族言語の教育支援を 10 年以上続けられてきた。本発表では、H 県で行う教育活動の事例を取り上げる。

1980 年以降、チベットでは民族教育の再建と学校教育の普及に伴い、多くの人々が学校で民族語の読み書きが習得できるようになった。読み書きのできない人々に比べ、学校教育を受けた世代は強い言語意識をもつことは想像できる。また、その言語意識は若者たちの民族的アイデンティティの形成につながる研究も少なくない。

近年、H 県で行われる教育活動を取り上げた研究も少しずつでありながら現れているが、そのほとんどでは教育活動の主体であるボランティアたちに注目されておらず、ボランティアたちは何のためにこの活動に参加しているのか、H 県の教育活動はなぜ 10 年以上続けられたのかは、不明のままである。

本発表では、H 県の教育事例を取り上げ、その背景と現状を概観する上で、ボランティアたちはこの活動をどう位置付けて、どのように意味付けてあるのか、彼らの語りから明らかにしていく。そして、今日のチベット社会において、言語復興運動がもつ意味を明らかにすることを目指したい。

## 古チベット語文献における印について

武内 紹人（神戸市外国語大学）

中央アジアから出土した古チベット語文献の中で、王宮や議会からの公式の通達文書には大きい方形の公印が、契約や手紙文書などの私文書には小さい丸形の個人印が、いずれも紙に朱のインクで押印されている。このやり方は中国からの影響の可能性が高い。ただ丸形の個人印は中国語契約文書には本来用いない。

古チベット語契約文書に極めて類似しているのは、バクトリア語契約文書であり、債務者や保証人の丸形の私印が押されている。ただし紙ではなく粘土に捺印する。したがって、印章は印文が彫り出された陰刻であり、紙に押す陽刻とは逆になる。

いっぽう古チベット語木簡では、手紙木簡を粘土で封印、つまり封泥している。現在スタインコレクションにある角製の印章は封泥に使った丸形の個人印で陰刻である。つまり古チベット語文献では、紙に押す陽刻と木簡に押す陰刻の両者が併用された。前者は中国からの影響で、後者は西アジアからの影響である可能性が窺える。

さらに古チベット木簡の形状を他言語木簡と比較すると、中国語木簡よりコータン語、バクトリア語、アラム語など中央アジアから西アジアの木簡と類似する点を指摘し、チベット文明形成期における西アジアからの影響についても考察してみたい。